

吾^わご^{おほきみ}王

天^{あめ}知らさむと

思^{おも}はねば

おほにそ見ける

和^わ束^{づか}山^{そま やま}

大伴家持(巻三・四七六)

この歌は『万葉集』巻三の挽歌の部に収められています。題詞と左注によれば、天平16(744)年春に安積親王が亡くなった時、内舍人(貴族の子息が務めた天皇近侍の職)であった大伴家持が2月3日に作った挽歌3首のうちの2首目に当たります。

家持が「私の大王」と慕った安積親王は、聖

武天皇と県犬養広刀自の間に生まれた皇子です。聖武の男子には、当時夫人であった光明が神亀4(727)年に生んだ皇子がおおりに、生後1カ月で皇太子に立てられるという異例の扱いを受けましたが、翌5年に天逝しました。その同じ年に広刀自が安積を生んでいます。

しかし、生後間もな

やまと
万葉がたり

立太子からの早逝という異母兄の前例を避けたためか、あるいは光明の男子がさらに生まれる可能性があったからか、安積が幼くして皇太子に立てられることはなく、異母姉の阿倍内親王(光明の女子、後の孝謙天皇)が天平10(738)年に史上初めての女性皇太子となります。当時の通念では、女性天皇に

は次代の男性皇位継承者を見する役割が期待されましたので、他の男子が生まれなければ安積が阿倍から皇位を継承する可能性もあり、それを望む人々も

おりました。家持は、そうした安積の立太子を期待する一人であり、たと考えられます。ところが天平16(744)年閏正月、聖武の難波宮行幸に供奉していた安積はにわかに脚病を発症して恭仁京へ帰り、まもなくなくなり、数え年でも迎えたばかりでした。安積の墓は恭仁(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

【訳】わが大君が天上の世界を治められようとは思ひもしなかったもので、以前は気にも留めずぼんやりと見ていたことだ、和束の山を。

京の北東にあたる和束山(現在の京都府和束町)に設けられました。

和束の地は恭仁京と紫香樂宮を結ぶ道の途中に当たり、当時の盲人たちがしきりに往来した場所です。家持は、かつてこの道を通った際に何気なく見ていた和束山の姿を思い起こし、安積の突然の死を悼む歌を作ったのでしよう。